

広報 Koho Gallery  
展示室

第34回

— 企画展 —

国貞の世界展—北斎より人気の高かった絵師—

幕末の花形浮世絵師、歌川国貞（後の三代豊国）は、「豊国にかほ（似顔）、国芳むしゃ（武者）、広重めいしよ（名所）」と『江戸寿那古細撰記』といわれたように、役者の似顔絵を描かせたら当時右に出る者のいない名人でした。

団扇絵に描かれたのは、五代目市川団蔵。渋い演技から、「渋団」、「渋団蔵」と呼ばれた役者です。国貞も、団蔵のなかなか渋い表情を捉えています。

この絵は、当時の人気歌舞伎俳優を、平安時代の優れた6人の歌人に見立てた『当世六歌撰』というシリーズの1枚で、団蔵は文屋康秀にたとえられています。「みかわやし古う」と書かれています。団蔵の屋号は三河屋、俳名は市紅といいました。

団扇絵は、団扇として使われるため残りにくいのですが、この絵は仕立てられずに現在まで残っており、興味深いことに、裏面にも絵が貼り合わされた状態で保存されていました。見本として



裏 絵

で作られたものだったのかもしれませんが。

裏絵の短冊には、「岫に風 なびくひいきも 憂い場に うちしほるも むべ山の段」と書かれています。これは文屋康秀の和歌「吹くからに



歌川国貞「当世六歌撰」  
天保4年（1833）  
文屋康秀「団扇絵」  
個人蔵

秋の草木の しをるれば むべ山風を 嵐といふらむ」をふまえており、「風が吹くとなびく草のように、団蔵のひいき客も芝居の場面ごとにゆれるが、切ない場面ではしおれている。なるほど、『山の段』だから」、という意味ですが、『山の段』は、団蔵が得意とした「妹背山婦女庭訓」という芝居の3段目を指しています。仲の悪い家に生まれた若い男女の悲恋の話ですが、団蔵はさぞ渋い演技でひいき客を涙ぐませたことでしょう。

『当世六歌撰』シリーズは、正面摺りやぼかしといった技術を多用し、細部にわたるまで丁寧に作られています。それぞれの役者のひいき客の満足を得るために、贅沢に作られたに違いありません。

8月3日（日）まで那珂川町馬頭広重美術館で開催される「国貞の世界展—北斎より人気の高かった絵師—」では、この作品を含め、国貞の役者絵や美人画を約50点展示いたします。「国貞の世界」を、どうぞお楽しみ下さい。

那珂川町馬頭広重美術館 学芸員 長井裕子

【会 期】 7月4日（金）～ 8月3日（日）

那珂川町が  
放映されます

放映日：7月21日（月）  
番組名：NHK  
「ふるさと一番」  
時 間：午後12時15分  
～12時45分  
※詳しくは当日の新聞等をご覧ください。

若船大橋のホタルブクロ



ミニ  
ギャラリー



ふるさとの森公園のハナシヨウフ